＼生き生き暮らせる／
日本式

「長寿」につながるリハビリ

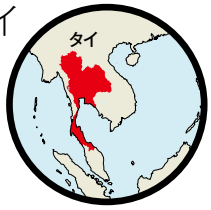
日本人の平均寿命は世界1位の84・2歳、乳幼児死亡率の低さは世界2位の0・9人（千人あたり。2018年世界保健機関）と、ともに順位が高い。すべての国民の健康に目配りするような医療・生活支援・介護サービスは、東南アジアのタイにも伝えられている。

現地の病院で医療関係者と対話を重ねた。課題を見つけ、解決方法を探っていく。

JICA専門家
米田裕香（よねだ・ひろか）さん（右から2人目）
2009年、理学療法士として日本国内の病院でリハビリテーションを行う。その後、青年海外協力隊を経て、イギリス留学で障害児の権利や社会参画を学んだのちJICAに入構。17年11月よりJICA専門家となり、本プロジェクトを担当する。

日本での研修は、中間ケアにおけるチーム医療の大切さやリハビリ方法、装具の使い方などの新しい知識を得る貴重な機会となった

長寿×高齢者ケア　Thailand タイ



中間ケアの充実で退院後の生活も安心

リハビリが必要な患者さんの未来を明るく照らす――
タイで、チーム医療による中間ケアの重要性が浸透しつつある。

案件名 高齢者のための地域包括ケアサービス開発プロジェクト
2017年11月～2022年10月

社会参加をかなえる十分なサービスを

日本の総人口に占める65歳以上の割合は2035年には約33パーセントになると予測されている（15年内閣府）。日本はそんな高齢化の時代を見すえて医療サービスを手厚くしてきた。この知見は急速に高齢化が進むタイでも生かされ、JICAは約10年前から協力し、17年から中間ケアに焦点を合わせた本事業をスタートさせた。

中間ケアとは、たとえば脳卒中などで身体に麻痺や障害が残った場合、病状が落ち着き自宅に戻れるようになるまでの間に行うリハビリテーション医療のことをいう。回復期の医療等サービスともいわれ、病気だけでなく、骨折などのけがを負ったあとに行うリハビリテーションも含まれる。実はタイの医療サービスのなかには日本のような中間ケアの概念が確立されていなかった。JICA専門家の米田裕香さんは次のように話す。

「公的病院を対象に、病気の治療・リハビリ・自宅に戻ってからの介護を切れ目なくできる場所を探しました。高度な施術が可能な基幹病院は、慢性的に多くの患者が集中するため、リハビリが必要な人にも短期での退院を促すことがめずらしくありません。そこで、タイ保健省の方針のもと郡の病院から中間ケアの展開を始めています」

郡の病院は全国に約800か所を数え、病床に比較的空きがある。今年の1月と2月には人材育成のために医療関係者を日本に招いて、中間ケアを肌で感じてもらった。

「いちばんの収穫はチーム医療を理解していただけたことでした。患者さんを中心に患者さんの家族、医師、看護師、理学療法士、栄養士らをはじめ、退院後の生活や役所関係の手続きの相談を請け負うソーシャルワーカーなどが、それぞれの立場から意見を出し合ってリハビリを進めていきます」

多くの研修員がタイでも取り入れると話してくれた。今後は自宅介護などのケアも視野に入れている。現在のタイの高齢化率は日本の約20年前と同程度の約12パーセント前後といわれており、来たる日のために備えが進んでいる。